



選考委員特別賞

リリー・フランキー賞

信じる

宮本 怜実

「信じることは生きるみなもと」

私たちのクラスは、秋に開催される合唱コンクールで、谷川俊太郎さん作詞の「信じる」を歌うことになった。谷川俊太郎さんと言えば、中学二年生になって国語の授業で「明日」という詩を学んだばかりだ。合唱コンクールに向けて歌詞を覚える前に、歌詞の意味を考えてみた。「自分」、「他人」、そして「世界」を信じることによって、自分をはじめ周囲の命に気づき、見えてくる世界があるという意味だろう。つまり歌詞の最後にあるように「信じることは生きるみなもと」ということだ。

この歌詞にメロディーがつくと、本当に感動的な曲になる。ただ、二番の歌詞に出てくる「地雷をふんで足をなぐした」と言う箇所が気になった。まわりを信じることによって気づかされる命の素晴らしさや、明日への希望など前向きな意味を持つこの曲の中に、なぜ谷川俊太郎さんは、「地雷」という違和感すら覚える言葉を選んだのだろうか？一体、地雷は現在の世界にどのくらい存在するのだろうか？私は、地雷について調べてみることにした。

日本にいる私たちは、普段の生活で「地雷」と言う言葉を使ったり聞いたりすることはあまりない。外出するときに、地雷に気を付けて歩いた記憶ももちろんない。たまに太平洋戦争時の不発弾が見つかり、自衛隊の爆弾処理班によって処理されたというニュースを耳にするのが、日常茶飯事ではない。日本には地雷が存在しないので当然と言えば当然だが、世界中にはまだまだたくさん地雷が存在するという。地雷は浅い地中や表面に置かれ、人や車が近づいたり触れたりすると爆発する兵器

である。地雷は大きく分けて「対戦車地雷」と「対人地雷」に分けられる。「対戦車地雷」は車両や戦車など100kg以上の重さで爆発する地雷だが、「対人地雷」は人の接近または接触によって爆発するように設計されている。なかには、地雷から伸びたワイヤーにつまみずくと爆発するものや、爆発時に小さな金属ボールが飛び散るものなど300を超える種類があるという。地雷は19世紀のアメリカ南北戦争の頃に初めて造られたといわれているが、「対戦車地雷」は第一次世界大戦時にドイツ軍が敵の戦車の動きを止めるために使ったそうだ。そして、その後の第二次世界大戦時に「対人地雷」が使われた。これは相手を「殺す」のではなく「傷つける」ことを目的とした兵器だという。相手を殺してしまわずに負傷させることによって敵の兵力を奪い、働けない人々を増やし、その国の経済力をも奪おうとする兵器である。人間の発想の恐ろしさを思い知らされる。また、製造コストが安価であり、1つが3ドルほどで製造できるため、大量に生産、使用されているらしい。

地雷はよく「悪魔の兵器」と呼ばれる。その理由に地雷の持つ3つの特徴があげられる。まずは残虐性、次に残存性、そして無差別性である。残虐性とは、先にも述べたが、そもそも地雷は兵士を負傷させることを目的として造られている。しかし負傷させるばかりではなく、その負傷兵を目撃した人に精神的な打撃と恐怖心を起こさせるために造られた兵器でもある。もちろん不幸にも地雷によって命を落とす兵士もいるだろうが、負傷したものは手足の切断、失明などの重度の障害が残ると言われている。本当に恐ろしく残酷な兵器である。地雷の残存性とは、一度埋められた地雷は半永久的に作動し、誰かが踏むまでじっと待ち続けるか、地雷除去されるまで残り続ける。国連の予測によれば、現在も約80ヶ国の地に4500〜5000万個の地雷が埋められているという。その多くはアジアとアフリカで、特にカンボジア、タイ、アフガニスタンはひどく、カンボジアに関しては依然として年間1000人近い被害者が出ているらしい。そして無差別性とは、地雷は攻撃する相手を選ば

ないということである。大人や子供、男性女性の区別なく、踏んだら誰でも傷つく。地雷は地方の経済活動を破壊するという目的も持っているため、農作物がたくさん採れる田畑や水汲み場、木の実や木材をとる山林や人の集まる広場などに多く埋められたそうだ。そのために被害者の7割以上は戦争とは関係ない一般市民だ。戦後、農作業中の人や、買い物のために外出した人、通学途中の子供たちなど、普通の生活の中で地雷の被害にあう人たちが後を絶たないというのが現状である。それにもかかわらず、地雷は戦争の兵器として今も使われ続けている。

家に坂本龍一さんの「ゼロ・ランドマイン」というCDがある。私は坂本龍一さんの曲が大好きで、ピアノでよく弾いている。「ゼロ・ランドマイン」というCDは2001年にリリースされたCDだが我が家では今も時々流れている。国内外の有名なアーティストが少しずつ歌いつないで一曲ができていく。ダイアナ元皇太子妃の朗読やグライラマ14世の説教が入った少し変

わった曲だ。それが地雷除去活動を支援するためのチャリティーソングだということを私は最近知った。このCDの売り上げは全額寄付され、地雷除去の費用として使われたそうだ。大げさかも知れないが、地雷問題の取り組みに私も一歩近づいた気がした。国連をはじめ、この問題に取り組んでいる団体、著名人はたくさんいる。しかし、地雷問題が解決するにはまだまだ程遠い状況らしい。1990年代頃から対人地雷問題に関する国際的な関心が高まり、1997年に「対人地雷全面禁止条約」通称オタワ条約という国際ルールが作られた。主な内容は対人地雷の使用、貯蔵、生産、移譲の禁止はもちろん、各国が所持している地雷の廃棄やすでに埋められてしまった地雷の除去、被害者の支援、地雷被害国への地雷対策のための資金や技術の支援などを規定している。2012年の時点で160ヶ国が参加しており、日本も加盟国である。日本もかつて、地雷を製造し自衛隊が100万個の地雷を持っていたらしいが、条約加盟後に廃棄し、カンボジアやアフガニスタンなどの埋設国へ

地雷除去のために資金援助もおこなっている。

さて、「信じる」にもどうだろう。谷川俊太郎さんは日米安全保障条約の締結に反対し、その運動に参加していたらしい。「平和」「反戦」「民主主義」への思いが強くと、作品の随所にそのメッセージがちりばめられているという。きっと「信じる」も、その流れをくむ作品なのだろう。美しい詩とメロディーの中へ「地雷」という唐突な言葉を使って、平和に慣れている私たちをハッとさせ、今も戦争や後遺症で苦しんでいる人たちがいることに気づかせてくれているのだろう。最近では新聞やテレビのニュースでウクライナの問題やイスラエル・パレスチナ情勢などが連日のように報道されている。間違はなく世界のどこかで今日も戦争をしている地域が存在している。今の私にできることを考えた。大きなことはできないが、私たちを取り巻く社会・世界に関心を持ち、現実を知り、命の尊さや平和について皆で考えることはできると思う。私は今までよりも、「信じる」の曲の持つ意味を考えて、心をこめて歌おうと思う。